

〔自著紹介〕

石野裕子

『「大フィンランド」思想の誕生と  
変遷—叙事詩カレワラと知識人—』

岩波書店 2012年



本書は、津田塾大学大学院国際関係学研究科に提出した博士論文「フィンランドの国民国家形成と叙事詩カレワラ研究」を基にしたもので、私の初の単著である。

カレワラ (*Kalevala*) という叙事詩はご存知だろうか。カレワラは口承で伝えられてきた詩で、フィンランドがまだロシア帝国の一部であった 19 世紀半ばに物語として編纂されたものである。話は世界の神話と同様に奇想天外なものである。大気の処女イルマタルの膝に小鴨が卵を産み、その卵が割れると黄身が太陽となって輝き、白身の上の方は月となって天地が創造されるところから物語は始まる。そこに老人の姿で生まれた英雄で、かつ呪術使いでもあるヴァイナモイネンが旅をする中で様々な人に出会う。なかでも有名なエピソードは「アイノの物語」である。ヨウカハイネンという若者と呪術比べで勝利したヴァイナモイネンは若者の妹アイノを嫁にする約束を取り付ける。しかし、アイノは嫌がり、最後には入水し魚となってしまう。

このような神話的要素が濃い叙事詩カレワラがフィンランドの民族意識、さらには国民国家形成に大きく貢献したといたら驚くだろうか。国民国家形成過程で文化が用いられることはよくあることである。しかし、カレワラはフィンランドの領土認識に影響を及ぼし、「大フィンランド」という膨張思想の根拠までなったとするアメリカの研究者の指摘に対してそれらの謎を解き明かそうとしたのが本書である。具体的には文学研究、民俗学研究に止まらず歴史研究として実践された学問としての「カレワラ研究」に注目し、神話が歴史として解釈されていく過程とフィンランドの国民国家形成過程で生じた諸問題との関係を考察した。特に、独立以前の 19 世紀から「大フィンランド」思想が広がった独立期、第二次世界大戦期、そして「大フィンランド」の夢が敗れた第二次世界大戦後といった時代ごとに活躍した 3 人の研究者のカレワラ研究とそれらの社会的影響に注目した。また、彼らが行ったカレワラ研究と「大フィンランド」思想とのつながり、

とりわけカレワラ口承詩が多く採集されたカレリア地方に居住するカレリア人への同族意識とのつながりを考察した。

このようなテーマに取り組んだきっかけはフィンランドの留学経験である。学部3年次になんとなく1年間ボランティア留学したフィンランドで、ホームステイ先の書棚に綺麗な装丁本の『カレワラ』があり、その奇想天外な物語に関心を抱いた。また、カレワラが広く、そして深くフィンランド人に愛されていることにも感銘した。帰国後、卒業論文でカレワラとフィンランドのナショナル・アイデンティティについて取り上げようとしたところ、日本語文献がほとんどなく、なんとか見つけたのは先にあげたアメリカの研究者の研究書であった（William A. Wilson, *Folklore and Nationalism in Modern Finland*, Bloomington: Indiana University Press, 1976.）。この研究によると、独立直後と第二次世界大戦期にフィンランドでは実際に独立時の国境を超える「大フィンランド」を実現しようとする動きが軍事的になされ、その根拠にカレワラが利用されたという。また、研究者らが率先してその根拠となる研究を行ったという。同書を読んで衝撃を受けたのを今でも思い出す。日本ではカレワラは平和的な叙事詩として紹介されていたからである。先行研究が指摘したことを調べるには卒業論文では時間が足らず、最初は念頭になかった大学院進学を考えるようになり（内定先の某企業でアルバイトしていたのに！）、紆余曲折があり今に至るのだが、上述の先行研究の衝撃が私を研究への道に導いたのである。

フィンランドというと現在では教育先進国、女性が活躍している国といった先進的なイメージや北欧雑貨、ムーミンなどといった魅力的な文化を発信している国というイメージで語られることが多いが、本書ではキラキラなフィンランドは当然ながら一切出てこない。フィンランド人が自分たちは何者かという問いかけを独立以降も絶えることなく行っていく過程の中で、一つの文化的アイデンティティの産物とされたカレワラをどう解釈していくかという研究者たちの格闘、換言すると「フィンランド性」との知的格闘を本書で扱っている。また、彼らの格闘の成果をみる社会の目は時代の影響によって変化したのであり、そこに「フィンランド性」の変化も見られたのである。本書では単純にカレワラ研究と「大フィンランド」という膨張主義が結びついたとする先行研究への批判を行いつつ、先行研究が指摘した文化解釈と政治性についての私なりの解釈を提示できたと思う。文化と政治の関係に関心がある方には是非読んでいただきたい。

なお、本書の表紙の絵は私が好きな画家アクセリ・ガッレン=カッレラの《ヴァイナモイネンの出発》1906年である。

執筆者

石野裕子（いしの ゆうこ・准教授）